

大浦一志——雲仙普賢岳／記憶の地層

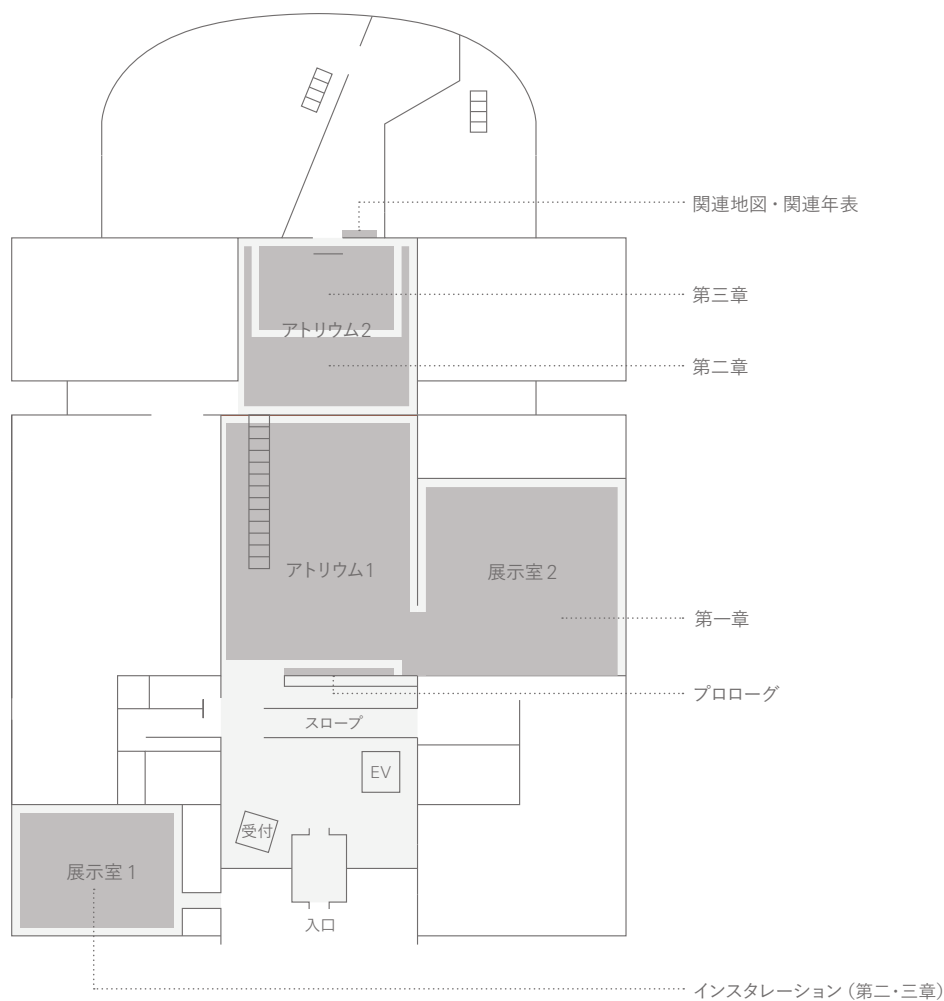
KAZUSHI OOURA: MT. UNZEN FUGEN / STRATA OF MEMORY

会期：2023年9月4日 [月]—10月1日 [日] | 会場：武蔵野美術大学 美術館展示室1・2、アトリウム1・2

主催：武蔵野美術大学 美術館・図書館 | 協力：武蔵野美術大学共通絵画研究室

凡例

- ・本展では大浦一志の活動を年代ごとに3章に分け、各章のはじめに解説を記し、該当する作品情報を記載した。
- ・各作品情報は、以下のように記載した。
作品番号 | 作品名 | 制作年 | サイズ | 素材 | 所蔵 | 展示場所
- ・作者はすべて大浦一志である。
- ・作品情報は、作家から提供された情報を元に、必要に応じて作家に確認のうえ記載したものであり、過去の情報と異なる場合がある。
- ・各作品の見出しには、シリーズ名を記した。
- ・サイズは縦×横もしくは縦×横×奥行きで記し、単位はセンチメートルとした。
- ・所蔵について、特に記載のないものは作家蔵である。
- ・作品番号は展覧会の展示順とは同一ではない。



プロローグ

1975年に武蔵野美術短期大学専攻科デザイン専攻商業デザインコースを修了後、トラック運転手などを経てデザイナーとして活動していた大浦は、1980年代後半より現代日本美術展への作品出品を始めます。プロローグではこの時期に制作された「無意識への追従」シリーズのうち、3点の作品を通してその展開を見ていきます。

無意識への追隨

1987~1992年

1987年から始まる「机上作品」は、大浦が自宅仕事部屋の机に製図台の保護材として敷いたイラストボードを、1年ごとに取り替える際に複写し、彩色などを施した作品です。1年間の行為や思考の痕跡が、自身の意図とは離れたところでボード上に表出している様子に関心を覚え、「無意識への追隨」と題し、6年にわたりこの手法を基にした作品を発展させてきました。

シリーズ6作目となる1991年、大浦は新たな展開を試みます。2《自我のなせるもの》では、イラストボードの複写に、作業机に向かって正面の壁の写真を重ねて二重露光し、日頃「触覚的に触れている水平面（イラストボード）」と、「視覚的に接している垂直面（壁）」を、一つの画面の中に同居させています。水平・垂直、触覚・視覚といった身体と対象との関係性は、その後も現在まで大浦の活動を貫く要点のひとつといえます。

3《杉並区阿佐谷南3丁目23-13↔30m》では水平面のイラストボードは維持しつつ、自宅から30m離

れた住宅の解体工場の現場が垂直面として撮影されています。ここでは水平面と垂直面が、それぞれ大浦との関係において「プライベートな領域」と「パブリックな領域」として二重写しになっており、大浦がパブリックの領域へ目を向けはじめた作品といえます。また本作では、撮影現場の土砂を印画紙の上のせ、その上からFRP樹脂で固めるという制作手法がとられています。虚実が定かでない視覚的なイメージである写真に、紛れもない実物である土砂を重ね合わせ現実を持ち込もうとする試みは、その後、雲仙普賢岳プロジェクト「写真とFRP」シリーズへと続きます。

1

《pull the wires (from behind) No.2》| 1987 | 105 × 146 | 印画紙、色鉛筆 | アトリウム1

2

《自我のなせるもの》| 1991 | 180 × 216.8 | 印画紙 | アトリウム1

3

《杉並区阿佐谷南3丁目23-13↔30m》| 1992 | 161.5 × 215 | 印画紙、土、石、FRP | 世田谷美術館 | アトリウム1

第一章

雲仙普賢岳プロジェクト

第1回(1992年)～第31回(2010年)

「無意識への追隨」シリーズを通して、「自分が見ているものは何であるか」という視覚そのものへの問いかけが、大浦の制作動機を中心にありました。そして、「この時代の視覚のリアリティとは何か」について疑問を抱えていた時期と呼応するかのよう^{*}、1990年11月、雲仙普賢岳の噴火活動が始まりました。大浦は、長崎県島原半島という東京からは地理的に遠く離れた場所で起こっているできごとを、テレビや新聞などを通して知ることになります。その中で1991年6月3日、それまでの噴火活動で最大規模の大火砕流が発生し、取材中の報道関係者や警備中の消防団員を中心に死者・行方不明者43人を出す大惨事が起こります。この災害を報じた同年6月6日の日本経済新聞に掲載されたある写真を目にし、大浦は大きな衝撃を受けます。「襲いかかる火砕流」と見出しのついたその写真は、火砕流の熱風のみこまれ殉職した記者が死の直前に撮影したもので、高熱によりカメラ内のフィルムが損傷し、写真の一部は大きな黒い穴として現像されています。ここで目にしてるのは、フィルムに写された視覚的な像であると同時に、熱風による被害を受けたフィルムそのものであるとも言えます。この黒い穴により、大浦は突如として見えていくことのリアリティを突きつけられます。

彼の死をもって捕えた写真に私の体は釘付けにされ、自分が生き、生活をしている今に、この「現実の出来事」は唐突に、鮮烈に私の内なる何かを揺るがした。(中略)

*私は「現実を直視する」ために普賢岳に向かった。私自身の五体、五感をもって「現実とは何か」を実感するために。**

そして翌1992年8月、大浦ははまだ噴火活動の続く島原を初めて訪れます。

*『雲仙普賢岳 被災民家跡を発掘する』(2021、武蔵野美術大学出版局)

写真とFRP

1993～1998年

被災地取材し、自らが撮影した写真をもとに作成したシリーズです。土石流の被災家屋(4～8、11)や建造物(9、10)、火山灰に覆われた民家(15)などが被写体になっています。中でも、16～20の連作に登場する「玄関扉」との出会い、大浦のその後の活動にとって非常に大きな意味を持つものでした。

1994年、火砕流被災地で目にした、焼失した民家跡に玄関扉のみが焼け残り立ち尽くしている光景は、大浦にとりわけ強烈な印象を与えました。これが、その後プロジェクトの拠点となる「横田家」との出会いでした。

16に写る玄関扉を掘り出した跡が18で、19、20ではその玄関扉を前の庭に20cmほどの穴を掘り水平に寝かせ、「埋葬」しています。掘るという行為に対して、掘り起こしたものを再度埋めるという行為が対になっていることが、大浦の活動の特筆すべき特徴ともいえます。そして大浦は地面に被災物を埋める行為を「埋葬」と呼んでおり、その言葉にはこの地で火砕流によって亡くなった方々への鎮魂の祈りが込められています。

4

《杉並区阿佐谷南3丁目23-13⇔普賢岳1992.08.31-1》
1993|153×210|印画紙、土、石、灰、木、FRP|展示室2

5

《杉並区阿佐谷南3丁目23-13⇔普賢岳1992.08.31-2》
1993|153×210|印画紙、土、石、灰、木、FRP|展示室2

6

《杉並区阿佐谷南3丁目23-13⇔普賢岳1992.08.31-3》
1993|153×210|印画紙、土、石、灰、木、FRP|展示室2

7

《杉並区阿佐谷南3丁目23-13⇔普賢岳1993.09.01-2》
1994|169.5×225|印画紙、土、石、灰、木、FRP|展示室2

8

《杉並区阿佐谷南3丁目23-13⇔普賢岳「家屋は深さを必要としていた」1993.09.01-5》|1994|169.5×225|
印画紙、土、石、灰、木、FRP|展示室2

9

《杉並区阿佐谷南3丁目23-13⇔普賢岳「再立」1994.
10.09-1》|1995|171.7×225|印画紙、土、石、灰、炭、
木、FRP|埼玉県立近代美術館|展示室2

10

《杉並区阿佐谷南3丁目23-13⇔普賢岳1994.10.09-3》
1995|225×171.7|印画紙、土、石、灰、木、FRP|展
示室2

11

《杉並区阿佐谷南3丁目23-13⇔普賢岳1994.10.09-5》
1995|171.7×225|印画紙、土、石、灰、木、FRP|展
示室2

12

《杉並区阿佐谷南3丁目23-13⇔普賢岳1994.11.27-4》
1996|171.7×225|印画紙、土、石、灰、木、FRP|展
示室2

13

《杉並区阿佐谷南3丁目23-13⇔普賢岳1994.11.27-5》
1996|171.7×225|印画紙、土、石、灰、木、FRP|展
示室2

14

《杉並区阿佐谷南3丁目23-13⇔普賢岳1994.11.27-6》
1996|171.7×225|印画紙、土、石、灰、木、FRP|展
示室2

15

《杉並区阿佐谷南3丁目23-13⇔普賢岳1994.11.27-7》
1996|171.7×225|印画紙、土、石、灰、木、FRP|展
示室2

16

《杉並区阿佐谷南3丁目23-13⇔普賢岳1995.11.25-1》
1997|159.5×230|印画紙、土、石、灰、炭、すすき、
FRP|展示室2

17

《杉並区阿佐谷南3丁目23-13⇔普賢岳「地一開」
1995.11.26-2》|1997|159.5×230|印画紙、土、石、
灰、炭、すすき、FRP|展示室2

18

《杉並区阿佐谷南3丁目23-13⇔普賢岳1995.11.29-
5》|1997|159.5×230|印画紙、土、石、灰、炭、すすき、
FRP|展示室2

19

《杉並区阿佐谷南3丁目23-13⇔普賢岳1996.09.01-
2》|1998|159.5×230|印画紙、土、石、灰、炭、木、
FRP|展示室2

20

《杉並区阿佐谷南3丁目23-13⇔普賢岳1996.09.03-
5》|1998|159.5×230|印画紙、土、石、灰、炭、ガラス、
FRP|展示室2

物質

1995年～

大浦の活動は次第に、取材をもとにした作品制作から、現地での発掘そのものへと移行していきます。「掘り起こし、動かせば、写真を撮るだけではない何かを捉えることができるのではないかと考えた」という玄関扉(22)に次いで、同じく横田家跡地で1998年には軽トラック(23)の残骸の発掘を始めます。この軽トラックは、1998年東京都美術館で開催された展覧会に出品されたのち、南島原市の道の駅みずなし本陣ふかえ(現・道の駅ひまわり)に收藏展示されました。その後大浦は、軽トラックを掘り出した跡地に発掘時に壊れ落ちた「小さな残骸たち」を並べ、その上から火山灰をふりかける試みを行なっています(「写真プリント」シリーズ28、29)。それは噴火後の自然の中で、人工の残骸物がどのように風化していくかという「残骸の行方」を探るものです。

また、直立する炭化した竹(21)は、1992年8月に大浦が初めて現地を訪れた際に採取したもので、雲仙普賢岳プロジェクトの中で大浦が最初に出会った「火砕流を受け止めた物質」です。

21

《杉並区阿佐谷南3丁目23-13⇔普賢岳「竹」1991.
06.03～》|2011|164×45×45|竹|アトリウム1

22

《杉並区阿佐谷南3丁目23-13⇔普賢岳「玄関扉」
1996.09.01》|1996|244.5×198×60|玄関扉、コン
クリート、灰、根、鉄|アトリウム1

23

《杉並区阿佐谷南3丁目23-13⇔普賢岳「軽トラック」
1998.04.18》|1998|130×150×330|軽トラック、土、
石、灰、ガラス、草、苔、鉄|株式会社エバーグリーン|ア
トリウム1

24

《杉並区阿佐谷南3丁目23-13⇔普賢岳「鉄器」
2017.08.16》|2023|38×38×25|鉄器、火山灰|アト
リウム2

写真プリント

25

《杉並区阿佐谷南3丁目23-13⇔普賢岳「溶岩ドーム」
1994.11.27-1》| 2023 | 120×176.5 | インクジェットブ
リント・アルミマウント | アトリウム2

26

《杉並区阿佐谷南3丁目23-13⇔普賢岳「溶岩石」
1994.11.27-2》| 2023 | 120×185.4 | インクジェットブ
リント・アルミマウント | アトリウム1

27

《杉並区阿佐谷南3丁目23-13⇔普賢岳「軽トラック」
1998.02.22-1》| 2023 | 176.2×230 | インクジェットブ
リント・アルミマウント | アトリウム1

28

《杉並区阿佐谷南3丁目23-13⇔普賢岳「残骸の行方」
1998.07.10-2-4》| 2023 | 288×160 | ターボリン | ア
トリウム1

29

《杉並区阿佐谷南3丁目23-13⇔普賢岳「自然と一体」
1998.12.23-1》| 2023 | 159.8×230 | ターボリン | ア
トリウム1

フォトコラージュ

「写真とFRP」シリーズで繰り返し登場した玄関扉
とその発掘場所が、本作ではカラーで写し出されて
います。大火砕流から5年が経ち、青い空のもと、大
地は緑の植物で覆われはじめています。

大浦は発掘した玄関扉を手前の庭に穴を掘り埋葬
しようとしていますが、雨天により玄関扉を寝かせた穴に雨
水が溜まってしまいます。その雨水が徐々に干上がるの
を待つと、灰で覆われた、まるで白骨化したかのような
姿の玄関扉が現れました。この時、大浦は地面が土で
はなく火山灰で覆われていることに気が驚きます。

本作では印画紙の継目43箇所にて現地で採取した
スキが十字架の形に結ばれており、1991年6月3日
の大火砕流で亡くなった43名の尊い命への哀悼の
意が込められています。

30

《杉並区阿佐谷南3丁目23-13⇔普賢岳1996.09.02-
20》| 1998 | 335×480 | 印画紙、たこ糸、スキ、布、
キャンバス | アトリウム1

フォトドローイング

1992~2009年

大浦は初めて島原を訪れて以来撮り続けてきた記録
写真を、B2サイズほどの画用紙に貼付し保管してお
り、その時々で大浦の目に留まった対象や、心情の断
片を見ることが出来ます。本展ではその膨大な仕事の
中から、一部を紹介します。

当初は写真を時系列に沿って並べていたものが、
玄関扉の埋葬風景を写した36からは、複数の写真に
より空間的な広がりを持たせたコラージュへと変化し
ていき、大浦が自身の手で掘り起こし、対峙してきた
大地を、手で再度確かめているかのようです。

また、初期は火山灰や土砂に覆われた様子を想像
させるようなモノクロ写真であったものが、1998年ご
ろを境に徐々にカラー写真が用いられるようになり、
被災地の自然を大浦がどのように捉えてきたのかと
いう変遷を見て取れます。

31

《杉並区阿佐谷南3丁目23-13⇔普賢岳1992.08.31-
3》| 1992 | 44×62.5 | 画用紙、印画紙 | アトリウム1

32

《杉並区阿佐谷南3丁目23-13⇔普賢岳1993.09.01-
10》| 1993 | 44×62.5 | 画用紙、印画紙 | アトリウム1

33

《杉並区阿佐谷南3丁目23-13⇔普賢岳1994.10.09-
5-2》| 1994 | 44×62.5 | 画用紙、印画紙 | アトリウム1

34

《杉並区阿佐谷南3丁目23-13⇔普賢岳1994.11.27-
22-2》| 1995 | 44×62.5 | 画用紙、印画紙 | アトリウム1

35

《杉並区阿佐谷南3丁目23-13⇔普賢岳1995.11.26-
4-1》| 1995 | 44×62.5 | 画用紙、印画紙 | アトリウム1

36

《杉並区阿佐谷南3丁目23-13⇔普賢岳1996.08.31-
13-1》| 1996 | 44×62.5 | 画用紙、印画紙 | アトリウム1

37

《杉並区阿佐谷南3丁目23-13⇔普賢岳1997.05.20-
1-2》| 1997 | 44×62.5 | 画用紙、印画紙 | アトリウム1

38

《杉並区阿佐谷南3丁目23-13⇔普賢岳1997.12.18-
3-2》| 1998 | 44×62.5 | 画用紙、印画紙 | アトリウム1

39

《杉並区阿佐谷南3丁目23-13⇔普賢岳1997.12.23-
16-1》| 1998 | 44×62.5 | 画用紙、印画紙 | アトリウム1

40

《杉並区阿佐谷南3丁目23-13⇔普賢岳1998.02.16-
3-1》| 1998 | 44×62.5 | 画用紙、印画紙 | アトリウム1

41

《杉並区阿佐谷南3丁目23-13⇔普賢岳1998.02.21-
1-3》| 1998 | 42×59.2 | 画用紙、印画紙 | アトリウム1

42

《杉並区阿佐谷南3丁目23-13⇔普賢岳1998.02.24-
18-4》| 1998 | 44×62.5 | 画用紙、印画紙 | アトリウム1

43

《杉並区阿佐谷南3丁目23-13⇔普賢岳1998.02.24-
19-1》| 1998 | 44×62.5 | 画用紙、印画紙 | アトリウム1

44

《杉並区阿佐谷南3丁目23-13⇔普賢岳1998.04.18-
22-3》| 1998 | 44×62.5 | 画用紙、印画紙 | アトリウム1

45

《杉並区阿佐谷南3丁目23-13⇔普賢岳1998.07.10-
1-2》| 1998 | 42×59.2 | 画用紙、印画紙 | アトリウム1

46

《杉並区阿佐谷南3丁目23-13⇔普賢岳1998.07.10-
2-2》| 1998 | 42×59.2 | 画用紙、印画紙 | アトリウム1

47

《杉並区阿佐谷南3丁目23-13⇔普賢岳1998.07.10-
2-4》| 1998 | 42×59.2 | 画用紙、印画紙 | アトリウム1

48

《杉並区阿佐谷南3丁目23-13⇔普賢岳1998.07.10-
4-2》| 1998 | 44×62.5 | 画用紙、印画紙 | アトリウム1

49

《杉並区阿佐谷南3丁目23-13⇔普賢岳1998.08.30-
2-2》| 1998 | 42×59.2 | 画用紙、印画紙 | アトリウム1

50

《杉並区阿佐谷南3丁目23-13⇔普賢岳1998.08.30-
3-1》| 1998 | 42×59.2 | 画用紙、印画紙 | アトリウム1

51

《杉並区阿佐谷南3丁目23-13⇔普賢岳1998.09.01-
5-2》| 1998 | 42×59.2 | 画用紙、印画紙 | アトリウム1

52

《杉並区阿佐谷南3丁目23-13⇔普賢岳1998.09.01-
7-2》| 1998 | 42×59.2 | 画用紙、印画紙 | アトリウム1

53

《杉並区阿佐谷南3丁目23-13⇔普賢岳1998.09.01-8-2》|1998|42×59.2|画用紙、印画紙|アトリウム1

54

《杉並区阿佐谷南3丁目23-13⇔普賢岳1998.09.02-9-3》|1998|42×59.2|画用紙、印画紙|アトリウム1

55

《杉並区阿佐谷南3丁目23-13⇔普賢岳1998.12.23-2-1》|1999|44×83.7|画用紙、印画紙|アトリウム1

56

《杉並区阿佐谷南3丁目23-13⇔普賢岳1999.02.20-1-2》|1999|44×62.5|画用紙、印画紙|アトリウム1

57

《杉並区阿佐谷南3丁目23-13⇔普賢岳1999.02.21-1-1》|2000|44×62.5|画用紙、印画紙|アトリウム1

58

《杉並区阿佐谷南3丁目23-13⇔普賢岳2000.01.05-9-1》|2000|44×62.5|画用紙、印画紙|アトリウム1

59

《杉並区阿佐谷南3丁目23-13⇔普賢岳2002.06.03-6-1》|2002|44×62.5|画用紙、印画紙|アトリウム1

60

《杉並区阿佐谷南3丁目23-13⇔普賢岳2003.01.02-1-1》|2003|44×62.5|画用紙、印画紙|アトリウム1

61

《杉並区阿佐谷南3丁目23-13⇔普賢岳2003.09.03-3・4・5-1》|2003|62.5×132|画用紙、印画紙|アトリウム1

62

《杉並区阿佐谷南3丁目23-13⇔普賢岳2005.01.04-1-1》|2005|44×75|画用紙、印画紙|アトリウム1

63

《杉並区阿佐谷南3丁目23-13⇔普賢岳2005.01.04-3・4-1》|2005|62.5×65.8|画用紙、印画紙|アトリウム1

64

《杉並区阿佐谷南3丁目23-13⇔普賢岳2005.01.05-6-3》|2005|62.5×44|画用紙、印画紙|アトリウム1

65

《杉並区阿佐谷南3丁目23-13⇔普賢岳2005.01.07-9-2》|2005|44×76.2|画用紙、印画紙|アトリウム1

66

《杉並区阿佐谷南3丁目23-13⇔普賢岳2005.04.06-1-1》|2005|44×62.5|画用紙、印画紙|アトリウム1

67

《杉並区阿佐谷南3丁目23-13⇔普賢岳2005.04.06-3-2》|2005|62.5×44|画用紙、印画紙|アトリウム1

68

《杉並区阿佐谷南3丁目23-13⇔普賢岳2006.10.25-4-3》|2007|44×85.5|画用紙、印画紙|アトリウム1

69

《杉並区阿佐谷南3丁目23-13⇔普賢岳2007.08.19-3-2》|2007|62.5×66|画用紙、印画紙|アトリウム1

70

《杉並区阿佐谷南3丁目23-13⇔普賢岳2008.01.25-6-1》|2008|44×90|画用紙、印画紙|アトリウム1

71

《杉並区阿佐谷南3丁目23-13⇔普賢岳2009.01.19-1-1》|2009|44×85.7|画用紙、印画紙|アトリウム1

分身

2003～2010年

1998年以降、軽トラックの「小さな残骸たち」が風化する姿を見守り続けてきましたが、2000年の冬には、その残骸たちが自然の中で枯葉や枯れ草と一体となっていることに驚きます。自然の中で風化していく残骸(人工物)をどのように扱うべきか自問していた大浦は、大火砕流から10年後の2002年、これまで島原での活動中に書き溜めてきた「言葉の記録」をまとめた紙束(=大浦自身の分身)を、トラックを掘り起こした跡地に埋めます。紙束は地中の水分を吸収し、徐々に風化していきますが、そのプロセスは常に大浦の予想を超える驚きをもたらします。紙束を埋める深さや期間をその都度変え、紙束を掘り起こすたびに「その間地中で何が起こったのか」を見つめ直していくこととなります。それぞれの紙束が地中に埋まっていた期間がタイトルとなっており、「分身-7」が欠番になっているのは現在も埋まったままのためです。

自身の思索の過程を「身体の内側」から掘り起こし「身体の外側」である自然に埋め、地中に埋まる記録文を掘り出す作業は、「過去の自身の記憶を掘り起こすようだった」と大浦は語っています。またこれまでの活動が「外側」である自然に対峙するものだとすると、自身(内側)と自然(外側)との関係を何らかのかたちで築こうとする試みであったともいえます。

72

《杉並区阿佐谷南3丁目23-13⇔普賢岳「分身-1」2002.06.03～2003.01.04》|2003|38×53×12|2003年の地面(土、石、灰、その他)、コピー紙(B4、180枚)、鉄製クリップ、プラスチックカゴ|アトリウム1

73

《杉並区阿佐谷南3丁目23-13⇔普賢岳「分身-2」2005.01.05～04.06》|2005|38×53×12|2005年の地面(土、石、灰、その他)、コピー紙(B4、180枚)、鉄製クリップ、段ボール紙、プラスチックカゴ|アトリウム1

74

《杉並区阿佐谷南3丁目23-13⇔普賢岳「分身-3」2005.04.07～11.09》|2005|38×53×12|2005年の地面(土、石、灰、その他)、コピー紙(B4、113枚)、鉄製クリップ、段ボール紙、プラスチックカゴ|アトリウム1

75

《杉並区阿佐谷南3丁目23-13⇔普賢岳「分身-4」2005.11.10～2006.10.23》|2006|38×53×12|2006年の地面(土、石、灰、その他)、コピー紙(B4、181枚)、鉄製クリップ、段ボール紙、プラスチックカゴ|アトリウム1

76

《杉並区阿佐谷南3丁目23-13⇔普賢岳「分身-5-1」2006.10.25～2007.08.18》|2007|38×53×12|2007年の地面(土、石、灰、その他)、コピー紙(B4、181枚)、鉄製クリップ、段ボール紙、プラスチックカゴ|アトリウム1

77

《杉並区阿佐谷南3丁目23-13⇔普賢岳「分身-5-2」2006.10.25～2007.08.18》|2007|38×53×12|2007年の地面(土、石、灰、その他)、コピー紙(B4、500枚)、段ボール紙、プラスチックカゴ|アトリウム1

78

《杉並区阿佐谷南3丁目23-13⇔普賢岳「分身-6」2007.08.20～2008.01.25》|2008|38×53×12|2008年の地面(土、石、灰、その他)、コピー紙(B4、32枚)、鉄製クリップ、段ボール紙、プラスチックカゴ|アトリウム1

79

《杉並区阿佐谷南3丁目23-13⇔普賢岳「分身-8」2009.01.23～2010.01.03》|2010|38×53×12|2010年の地面(土、石、灰、その他)、東見本(四六判、約800頁)|アトリウム1

第二章

雲仙普賢岳プロジェクト

第32回(2011年)～第47回(2016年)

雲仙普賢岳の噴火から20年が経ち、復興工事が進んでいく中で、大浦がフィールドワークを続けてきた被災民家跡地にもさまざまな変化が訪れました。

2002年、軽トラックの「小さな残骸たち」(第一章28、29)が仮設道路の敷設により土中に埋もれることになりました(62)。さらに2005年には敷地全体が1mほど土砂で埋められ、2008年には竹藪までもが取り除かれ整地され(70)、それまでの風景は一変しました。土石流等の土砂災害から地域住民の生命や財産を守ることを目的に、砂防ダムや導流堤の建設が行われてきましたが、1995年からこの場所で一人黙々と噴火後の自然と向き合ってきた大浦は、この時の心情を『「記憶の風景が消えた」』のである。当時の地面は残骸とともに地中に埋まり眠った。この地域の風景はこうにして少しずつ変貌し災害復興を遂げた風景に生まれ変わって行くのだろう。それでも私は、隠れて見えなくなった地面に向かい近づくしかない」と記しています。

その頃、すぐ隣で行われていた縄文晩期の遺跡発掘調査の現場を見学する機会を得て、大浦は「記憶の風景」のさらに下の地層に「太古の地面」が存在していることに驚き、その視線は地中へと向かいます。『「20年前と1万年前の二つの地面」』を同時に開き、地中の時間と歴史を感じる場を設定してみたい。その20年前と1万年前の地面に立った時、現代を生きる人間は必ず何かを感じるはずである」と。こうしたことがきっかけとなり、南島原市教育委員会文化財課と何度か話し合いを経て、共同で発掘していくプロジェクトへと進展しました。

私たちは、歴史的・考古学的に貴重な過去の地層を二階層に掘り分け「地球上の二つの出来事の調査・研究」を目的としている。これは、「考古学の目」と「美術の目」を融合させ「複眼の視点」で、二つの貴重な文化遺産を発掘し、調査研究を行うことである。同時に、未来に開かれた空間と時間を表出し「太古からの縦の時間軸が見える場」を開示したい。*

大浦の視線は20年前の地層のさらにその奥へ、必然とこの島原の歴史へと向けられます。発掘現場のそばに立つ被災したハゼの古木**が気になっていた大浦は、2013年には島原半島に唯一残る木蠟の製造者を訪ね、樹木の健康状態について相談します。この地の歴史を刻んだハゼの木を残したいと願い、自ら手入れをしながら見守っていく決意をします(94)。

*2010年6月15日 平成23年度短期国内研究計画書(大浦)

**実が木蠟の原料となる。1792年の雲仙岳噴火の後、火山灰の土壌に強いハゼの栽培を島原藩が推奨したと言われ、かつては木蠟の生産が盛んだった。94のハゼはかなり古くからこの地にあったものだと思われる。

「重層・発掘プロジェクト2011-2015」

南島原市教育委員会文化財課と共同で、被災民家跡と縄文時代晩期の遺跡を発掘していくこととなったこのプロジェクトは、5年間にわたり計9回実施されました。2015年8月までは被災民家の発掘を大浦が一人で進め、取り出した遺物を分類していきます。

2011年には降雨によって流れ込む土砂と石から発掘現場を守ろうと、流されてきた噴石を積み上げ石垣(93)を作ります。降雨のたびに壊されては修復をし、作業は3ヶ月間続きました。また、プロジェクトの一環として発掘現場でワークショップ(雲仙普賢岳・20歳の石)を行い地域に「開かれた空間」を創出していく一方で、導流堤が発掘現場の一部を飲み込む形で完成するなど、復興工事も徐々に進んでいきます。大浦は、こうした様々な事象を丁寧に記録撮影し、作業の経過を書き記していきます。

「被災民家跡、発掘プロジェクト2016」

大浦は「重層・発掘プロジェクト」後も被災民家跡を引き続き発掘調査し、公開に向けて動き出します。南島原市教育委員会教育長へ宛てた手紙の中で、大浦は「…現在、大火砕流で被災した民家跡は国土交通省の砂防指定地域内で、土砂に埋もれながら人間の目から消え去ろうとしています。(略)しかし私たちは、この『自然の驚異と人間生活が出会った場』を見失ってはならないと考えます。(略)この地の重要性を開き示すことが、私に課せられた宿命ではないかと自覚しています。(2016年2月2日)」とその思いを述べています。

この年6度島原を訪れ、90日以上を被災地で汗を流した大浦は、南島原市教育委員会や雲仙復興事務所(現、雲仙砂防管理センター)をはじめとした方々の協力を得て、発掘した被災民家跡の一般公開へと漕ぎ着けました。多くの人々に過去を見つめ、未来へ思いを馳せる場を届けたいという大浦の思いが込められたプロジェクトといえます。

水の刻^{とき}

被災民家跡地の一角で被災前の地面を目指して掘り進めた穴を日々記録したものです。掘り始めて6日目、2011年5月18日に20年前の地面に辿り着きました(深さ約1.5m)が、23日に降った雨で穴は池のようになりました。その後は地中の水脈からの水も混じり合い、水面は様々な表情をみせます。刻々と変容する光景は「自然の驚異」を改めて感じさせてくれます。そしてこの穴は、6月10日夜の大雨で土砂が流れ込み、一晩で完全に埋まってしまうのです。

80

《杉並区阿佐谷南3丁目23-13⇔普賢岳「水の刻」2011.05.20》|2011|75×100|印画紙、FRP|アトリウム2

81

《杉並区阿佐谷南3丁目23-13⇔普賢岳「水の刻」2011.05.23》|2011|75×100|印画紙、FRP|アトリウム2

82

《杉並区阿佐谷南3丁目23-13⇔普賢岳「水の刻」2011.05.26》|2011|75×100|印画紙、FRP|アトリウム2

83

《杉並区阿佐谷南3丁目23-13⇔普賢岳「水の刻」2011.05.27》|2011|75×100|印画紙、FRP|アトリウム2

84

《杉並区阿佐谷南3丁目23-13⇔普賢岳「水の刻」2011.05.30-1》|2011|75×100|印画紙、FRP|アトリウム2

85

《杉並区阿佐谷南3丁目23-13⇔普賢岳「水の刻」2011.05.30-2》|2011|75×100|印画紙、FRP|アトリウム2

86

《杉並区阿佐谷南3丁目23-13⇔普賢岳「水の刻」2011.05.31》|2011|75×100|印画紙、FRP|アトリウム2

87

《杉並区阿佐谷南3丁目23-13⇔普賢岳「水の刻」2011.06.03》|2011|75×100|印画紙、FRP|アトリウム2

88

《杉並区阿佐谷南3丁目23-13⇔普賢岳「水の刻」2011.06.04》|2011|75×100|印画紙、FRP|アトリウム2

89

《杉並区阿佐谷南3丁目23-13⇔普賢岳「水の刻」2011.06.08》|2011|75×100|印画紙、FRP|アトリウム2

物質と写真

被災民家跡を発掘していく中で撮影した写真と、その時採取した物質——普賢岳の写真とその普賢岳がもたらした火山灰、発掘途中の被災民家跡の写真とその発掘現場で溜まった雨水や滲み出してきた水、土砂の流入を防ぐために積み上げた石垣の写真と流れ出てきた石が、上下に対比されています。

90

《杉並区阿佐谷南3丁目23-13⇔普賢岳「水」1991.06.03~2011.09.23》|2011|296.5×200×3|印画紙、2011年の水|アトリウム2

91

《杉並区阿佐谷南3丁目23-13⇔普賢岳「灰」1991.06.03~2011.09.23》|2011|296.5×200×3|印画紙、2011年の灰|アトリウム2

92

《杉並区阿佐谷南3丁目23-13⇔普賢岳「石」1991.06.03~2011.09.24》|2011|296.5×200×3|印画紙、2011年の石、ビニール袋|アトリウム2

被災物・保護

93

《杉並区阿佐谷南3丁目23-13⇔普賢岳「噴石一積層」2011.09.24-2》|2011|120×256|ターボリン|2F北側スロープ

94

《杉並区阿佐谷南3丁目23-13⇔普賢岳「被災ハゼ」2016.01.18-2》|2016|300×222|ターボリン|2F北側スロープ

連続写真

95

《杉並区阿佐谷南3丁目23-13⇔普賢岳「母屋・玄関部」2016.08.04~08.20》|2023|106.7×835|インクジェットプリント・紙|アトリウム2

第三章

雲仙普賢岳プロジェクト

第48回(2017年)～第52回(2022年)

2016年まで続いた一連の発掘プロジェクトによって、被災民家跡の別棟と庭部は掘り出したものの、母屋部分は未だ管理道路下に埋もれた状態でした。大浦は、その残骸が埋まっていると思われる部分を引き続き掘り進めていくことを決意します。発掘現場の西側に位置する管理道路下部を発掘すると、火山灰や焼失した家屋の灰の層が残っていました。2017年8月9日には、噴石に張り付いた鉄板や生活具らしき鉄の器(24)を発見し、続いてアルミサッシの断片や建家の土台石などを見つけます。このように、26年前の「この地の記憶が地中に存在していること」を改めて確認していきました。また、25年という歳月を経て、初めてこの被災地に自らの作品を持ち込むことを考えます。「自身の内部」「虚像」である作品を「外部世界」「火山灰」という自然の中に埋め、数ヶ月後に掘り出そうというものでした。

しかし2019年、3回目の試みの最中、大浦は背中に異常な圧迫感を覚え作業を中断します。「急性大動脈解離」と診断され、そのまま大村市にある国立病院機構 長崎医療センターへ救急搬送されて入院を余儀なくされました。回復後、主治医から「あなたは死を免れないところだったのですが、まだやるべきことがあるということなんでしょう…生きよ!ということですよ。」と、天啓にも似た言葉を投げかけられます。大浦は体調を整えながら時期を待ちますが、2020年、2021年と新型コロナウイルス感染症拡大の影響を考慮し、島原行きを断念します。その間に普賢岳の灰を自らの作品に用いる新たな展開を開始しています。そして2022年、3年ぶりに島原に戻り、2019年に埋めたままになっている「埋葬-3」(98)の発掘準備を行いました。大浦の雲仙普賢岳プロジェクトはまだ続いていきます。

埋葬・発掘

2018年～

これまでの「被災地の残骸を掘り出し、元の自然に戻す」という行為（第一章、物質シリーズ）や、「自身の記録や記憶の文章を埋めて掘り出す」という試み（分身シリーズ）に続き、「自身の作品を埋めて掘り出す」という試みを行います。「現代を生きる私の思索『自身の虚像』（作品）を、その大地『噴石灰の実像』（自然）に埋めて掘り出す行為を通して『人間にとって火山噴火（自然）とは何か』を美的領域から探りたいと大浦は記しています。

これまでに自身が撮影した中から特に記憶に残った写真を拡大印刷してそれを作品とし、被災地面まで50cmの位置に埋葬します。この「自身の内部」を埋葬した場所は、定点観測点となっている足場と被災民家跡地との間であり、さらにその延長線上には普賢岳が聳えています。

96

《杉並区阿佐谷南3丁目23-13⇔普賢岳「埋葬-1」
2018.03.14～08.11》| 2018 | 107×146 | 紙、灰、根 |
アトリウム2

97

《杉並区阿佐谷南3丁目23-13⇔普賢岳「埋葬-2」
2018.08.21～2019.03.08》| 2018 | 107×146 | 紙、灰、
根 | アトリウム2

98

《杉並区阿佐谷南3丁目23-13⇔普賢岳「埋葬-3」
2019.03.14～60》| 2019 | 171.7×230 | ターポリン | 2F
北側スロープ

灰の絵画

2023年～

普賢岳の火口から噴き出した火山灰はやや薄桃色を帯びた色をしています。大浦は、この火山灰を真っ白なキャンパスに幾層にも重ねて塗り、それを豚毛の筆で中心から少しずつ削り落とすという、いわば「平面を発掘する」行為を試みました。筆の毛は灰のガラス質によって徐々に磨耗し、大浦は何本も筆を取り替えて作品を完成させています。

「埋葬・発掘」シリーズとは逆に、「灰」（自然）を用いて「自身の虚像」（作品）を映し出したかのようなこの作品は、大浦の雲仙普賢岳プロジェクトの新たな展開を予感させるものです。

99

《杉並区阿佐谷南3丁目23-13⇔普賢岳「火山灰」
1991.06.03》| 2023 | 226×182 | キャンパス、火山灰、
デンブンのり | アトリウム2

インスタレーション

第33～51回 雲仙普賢岳プロジェクト（2011～2019年）での発掘作業の様子を記録撮影した映像を、大浦が長年活動を展開してきた被災民家跡地で採取した土砂とともにインスタレーションとして展示します。記録映像はノーカットで上映され、収録時の時間の流れがそのまま再生されます。

鑑賞者は雲仙岳の雄大な自然の中で大地と対話する大浦の姿を目撃し、彼が日々書き連ねた言葉に出会うことになります。

100

《杉並区阿佐谷南3丁目23-13⇔普賢岳「絶対時間」
2011.05.04～2019.03.15》| 2023 | 映像、土砂 | 437
時間 | 展示室1

関連情報

雲仙普賢岳噴火

雲仙岳は長崎県島原半島の中央に位置する火山群の総称で、普賢岳はその主峰です。普賢岳は1990年11月17日、「島原大変」と呼ばれる1792年の噴火以来、198年ぶりに噴火活動を再開しました。1995年2月に溶岩ドームの成長が停止するまでの約4年間続いた噴火活動は、幾度にもわたり火砕流と土石流を引き起こし、地域一帯に甚大な被害を与えた長期継続災害でした。なかでも1991年6月3日に発生した火砕流は報道関係者や地元消防団など死者・行方不明者43名、家屋焼失・倒壊179棟を出す大惨事となりました。このとき亡くなった報道関係者は避難勧告地域内にあった「定点」と呼ばれる撮影ポイント周辺で取材中に被災しており、「定点」には現在、被災者を弔う三角錐のモニュメントが設置されています。

噴火活動によって普賢岳山頂部の火口に成長した溶岩ドームは、それまでの主峰（標高1,359m）を超える高さとなり、1996年に「平成新山」と名付けられた時点での標高は1,486m、現在は1,483mとなっています。

[総被害状況]

溶岩総噴出量：200,000,000m³

火砕流発生：9,432回

土石流発生：62回（1991～2000年）

死亡・行方不明：44人

負傷：12人

建物被害：2,511棟（うち住家1,399棟）

火砕流

粘度の高い溶岩が火口から押し出されると、溶岩は火口付近に積み重なり、「溶岩ドーム」を成形します。マグマの供給が続き溶岩ドームが崩れ落ちると、高温の火山灰・軽石・火山岩塊などが火山ガスとともに一団となって山を流れ下る「火砕流」という現象が発生し、その温度は数百度、流下速度は時速100kmを超えます。また、火砕流の周辺には「火砕サージ」と呼ばれる高温爆風が生じ、火砕流本体が到達しない場所にも高温による被害をもたらします。

土石流

度重なる降灰と火砕流によって山腹に堆積した土砂が、雨水と混ざり高速で流下する「土石流」となって、幾度にもわたり水無川、中尾川の下流地域を襲いました。警戒区域の設定により土石流での人的被害（死者・行方不明者）はありませんでしたが、家屋倒壊や農地の埋没、さらには道路や鉄道の断絶など広範囲の住民の生活に大きな被害を与えました。1992年8月には台風による大雨で大規模な土石流が発生し、この時の被災家屋の一部が「土石流被災家屋保存公園」として現在も残されています。

「横田家（被災民家）」

（旧住所：長崎県南高来郡深江町大野木場成1600番地）

1994年、大浦が被災地を取材中に出会った「玄関扉」は、葉タバコ農家を営む横田実さんの一家が暮らした家屋のものでした。現在も被災した校舎がそのまま保存されている旧大野木場小学校の西側400メートルほどの距離に位置する横田家は、1991年6月3日と9月15日に発生した二度の火砕流の熱風によって焼失し、その後発生した土石流によって地中に埋もれました。1995年に玄関扉、1998年に軽トラックを発掘したこの場所が、大浦の活動の中心となります。深江町は市町村合併により2006年に「南島原市深江町」となり、現在横田家跡地は国土交通省の指定する砂防指定地となっています。

本展関連イベント

[アーティストトーク]

日時：2023年9月9日 [土] 15:30-17:00

出演：大浦一志

[特別対談]

日時：2023年9月16日 [土] 15:30-17:00

出演：大浦一志

榎木野衣（美術批評家、多摩美術大学教授）